



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	地域課題克服のためのツーリズム研究を目指して：巻頭言に代えて
Author(s)	山村, 高淑
Description	2022年度オンライン観光創造フォーラム。2021年12月17日-2022年9月4日。オンライン。北海道大学観光学高等研究センター。
Citation	CATS 叢書, 17, 1-383
Issue Date	2023-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/88570
Type	other
File Information	CATS17_1.pdf



地域課題克服のためのツーリズム研究を目指して

——巻頭言に代えて

山村 高淑

北海道大学観光学高等研究センター センター長／教授

本書は、北海道大学観光学高等研究センターが2021年12月から2022年9月にかけて開催した、連続オンライン観光創造フォーラムの講演記録を叢書として取りまとめたものです（開催日時につきましては目次をご参照下さい）。まずは、ご登壇を頂いた上に講演録のご校正まで頂きましたゲスト講師の皆様、主催者を代表いたしまして厚く御礼申し上げます。また、フォーラムをご視聴頂きました皆様に心からの謝意を表します。有難うございました。

さて、今回のテーマは、本書の題目にもありますように、「ツーリズムを通じた地域課題の克服に向けて」と致しました。実は、このテーマは、私ども観光学高等研究センター設立時（2006年）からの、センターの活動の最重要命題です。センタースタッフの世代交代も進む中、今回、あらためて私どもの研究活動の原点を見直すべく、このテーマを掲げることと致しました。

地域が抱える様々な課題の克服のために、ツーリズムという仕組みをどのように活用することができるのだろうか？ その際、注意すべき点、課題となる点は何であろうか？ こうした「問い」を、北海道という立地を踏まえ、中央ではなく地方の観点から、地域で汗をかくて頑張っている皆さんと一緒に考えていくこと。これが私どもセンターの責務だということ、自戒の念を込めて、スタッフ一同、改めて肝に銘じておきたいと思います。

こうした命題を踏まえた上で、敢えて批判を覚悟の上で申し上げれば、弊センターでは、国際的に著名な研究者を招聘してレクチャーをしてもらうよりも、地域で汗をかくて頑張っている方々の生の声に真摯に耳を傾けたい。そして、学会のように、専門性を同じくするメンバーだけにフォーラムを聞いてもらうのではなく、地域課題解決という志を同じくする皆さんに、年齢・肩書などの立場を超えて、幅広く聞いて頂きたい、そう考えています。

もちろんそのためには、大学の研究センターとしての、高い学術性による裏打ちが必要なことは言うまでもありません。この点については、センタースタッフ個々が真摯に取り組むべき課題として、常日頃の精進を怠らぬようにしたいと思います。

いずれにしても、こうした、地域でがんばっている皆さんと一緒に、「ツーリズムを通じた地域課題の克服」について考えていくにあたり、オンラインによるフォーラムという形式

は、スタッフにとっても、参加者の皆様にとっても、非常に強力なツールになりました。

もちろん、当初は、新型コロナウイルスの世界的流行により、対面形式での開催を控える必要が生じたことから、半ば止むを得ない形でのオンライン開催ではありました。しかしながら、その後三年間、オンライン形式でのフォーラムを継続する中で——昨年の講演録（CATS 叢書第 16 号）の緒言でも触れましたが——これまでの対面形式では得られなかったメリットがあることに気付かされたのです。

具体的に言うとそれらは、情報面・交通面での地理的制約を克服できること、したがって参加者の、参加に伴う交通費等の経済的負担を軽減できること、そして、会場のキャパシティやロジスティクスといった物理的・予算的制約から解放されること、等々でありました。興味深いことに、こうした地理的制約や予算制約といった課題自体が、地域（地方）が抱える課題の核心的な部分そのものであったことに、図らずも気付かされました。

もちろんオンライン形式は、対面による熱量の伝達やライブ感には到底及ばないという点があります。しかし冷静に、地域・地方の立場から、オンライン開催のメリットとデメリットを天秤にかけてみると、明らかにオンライン開催の方が、メリットが大きい……オンラインフォーラム三年目を迎え、私どもは、そうした実感をますます強めた次第です。おそらくこうした事柄は、東京のように、様々なイベントが数多く開催され、しかもそうしたイベントに容易にアクセスできる地域では気づかない点ではないでしょうか。先ほど、「地理的制約や予算制約という課題は、地域（地方）が抱える課題の核心的な部分」と述べたのはそのような意味でもあるのです。

2022 年度末現在、弊センターは、専任スタッフ 3 名、研究員 2 名、事務スタッフ 1 名の、計 6 名からなる、規模的にも予算的にも、北海道大学の中で最も小さな研究組織のひとつです。もちろん、大小いろいろな研究組織があつて良いと思います。大学とは、独自性が高く個性豊かな、様々な人材・組織が、個人事業主のように集合して、学問の「商店街」を形成する場所である、と私自身は考えています。商店街には大きなお店もあれば、小さなお店もある。でも、大きいから良いお店、小さいから悪いお店、ということはない。小さなお店だからこそできるサービスもある。そう信じて、センターの活動を今後も継続して参りたいと思います。引き続き、弊センターの活動へのご理解とご支援を賜りますよう、何卒宜しくお願い申し上げます。

最期に、今回も、オンラインフォーラムの企画から運営、広報、本叢書の編集・刊行まで、観光学高等研究センター事務補佐員の野田由紀子さんの手厚いサポートに支えて頂きました。この場を借りて心からの謝意を申し上げます。

2023 年 3 月 1 日